

# Imitation Bijou

高井 康充

鈴木敦子の写真に「赤」をみる。写真に描き出された赤であり、そこにはなかった一し  
かしながら深閑な雪景色にさえ滲<sup>にじ</sup>む一不在の赤である。この色を喩えるならば、肌の下で  
流れる血潮のそれではないか。彼女の作品を前に、自ずとこうした考えが湧いてくる。

しかし、この赤を直接目にすることはないだろう。なぜならそれは、私の、私たちの身体  
から流れ出たものではないからだ。むしろ生命を生命たらしめる「内なるもの」、「内に秘  
めたもの」でなければならない。だからこそ多くの写真において彼女は、被写体と呼ぶべき  
ものを直接撮影しようとしていない。水溜りに淀む信号灯、鏡に映り込む人物にガラス越し  
の風景、そしてモニターに映し出されたイメージ（のイメージ）。鏡像、透過、投影…それ  
らが幾重にも重なる先に、鈴木の写真は生まれ、彼女の「赤」が浮かび上がる。

太古の昔、人類は自らの内に感じた脈動から原初の音楽を生み出した。鈴木もまた内にあ  
る確かな存在を文字通り「表現」しようと試みる。それが彼女にとっての写真だった。その  
視線は外へ、他者へと投げかけられ、乱反射する光の中で自分自身へ、そしてその内へと還  
る。鈴木は展覧会に寄せてこう記す〈大切なものを手に入れたくて写真を撮り続けていた  
ら、私達には本当の名前なんてない事に気が付いた〉と。シャッターが切られる瞬間、自己  
と他者は限りなく近づき重なり合う。それは両者を区別する名前など必要なくなる、鈴木に  
とってかけがえのない瞬間なのではないだろうか。